

吉野のマンガ作成中



作成中の原画(一部)

生誕一二〇年を記念して、現在吉野作造のマンガを作成中です。吉野作造というと「大正デモクラシー」や「政治学」など、一般に聞きなれない言葉がならびますが、今回のマンガはそうした面から少し視点を変えて、吉野の「人間」を中心に活躍をたどります。

吉野の夢と病院に集まった弟子たちの回想の中で吉野の人となり語られます。少年時代、学生時代、結婚を経て浪人会との立会演説会や、毎週一回自宅を開放した面会日のこと、関東大震災など、激動の時代の中で生きる吉野を紹介します。

これを機会に、吉野作造にもっと親しんでいただければ幸いです。

吉野の夢と病院に集まった弟子たちの回想の中で吉野の人となり語られます。少年時代、学生時代、結婚を経て浪人会との立会演説会や、毎週一回自宅を開放した面会日のこと、関東大震災など、激動の時代の中で生きる吉野を紹介します。

これを機会に、吉野作造にもっと親しんでいただければ幸いです。

移動研修レポート

古川高校では、一昨年から一年生を対象にした移動教室を当記念館で実施しています。

昨年は、十月二十八日から十一月十九日まで政治経済、倫理の担当の先生がクラス毎に引率し、午後一時半から吉野作造の生涯や企画展の説明を聞き、レポートを作成しました。今回は、その中から優れた一文を紹介します。

時代を創った勇敢な男

— 吉野作造 —

古川高校一年 今野 拓 弥

「吉野作造は一つの人間のモデルである。」

案内人の横山先生はこうおっしゃった。僕は、この言葉を聞いたとき、思わず身震いしたのを覚えている。そうさせるほど吉野作造という人はすごく偉い人なのだ。

田舎生まれのこの人物は、今では日本の誰でもが知っている偉人である。それは、彼の育ち方であったと思われる。彼の家は綿屋をしていた。そして副業として新聞や雑誌の仲介屋をしていた。政治や経済その時代の社会情勢を常にいち早く察していたのである。

ここで、彼と僕を比較してみよう。彼が黙々と勉学に励み、新聞や雑誌を読んで教養を深めていた時、僕は外で野球をし、マンガやテレビを見て笑い転げていた。何を比べても、やはり

彼の方が立派だ。しかし、彼と僕を比較しても何の意味もないことに気づいた。なぜなら、生きていた時代が違うからだ。どんな人だって厳しい環境に置かれたら、険しい人間になるものだ。僕は、平和で民主主義の確立した日本に生きているのだ。

いわば、甘ったれたところで育ったのだ。ここで知っておかなければならないのは、その土台を創ったのが、まぎれもなく吉野作造だということだ。

別に僕はこの平和な日本を悪く言うつもりはない。ただ、平和な日本にどっぷり浸ってしまっただおかげで、大切なもの、人の命や心を軽視している日本人がいるということが嘆かわしいのだ。

現在、日本は静かな動乱の時代を迎えている。不況、戦争の

放棄を掲げているにもかかわらず、日本本土での実弾演習、税金の無駄遣い。

まさに、今日本は狂っている。この状況を吉野作造が見たらきっと嘆き悲しむだろう。彼は勇敢な人だった。当時、浪人会の弾圧に耐え、彼は命懸けで民本主義を唱えていた。それに対して、今の政治を始め、大企業、裁判うやむやにしてしまう利己的な人間がいる。人間は絶体絶命の窮地に追い込まれたときに、簡単に仲間を裏切ることのできる、ある意味で醜い生物だ。こんな生物の集団では、必ずトラブルが起き見過ごしていると、その集団はおかしくなる。今の日本は、ある意味でその状態にあるといえるだろう。いずれ人間は滅びの道を歩むことになるだろう。僕たち人間はそうならないために、もっとしっかりしなければならぬ。

吉野作造はしっかりとした人間だった。彼のような人が現れれば、日本にも明るい未来が見えてくる。

しかし、そのような救世主を待つという考えでなく、自分が救世主になる、という考えでなければならぬのである。だから、僕たちはそうなるためにも、今一番しなければならぬことを自覚し、使命感と責任感を胸に秘め、日々邁進すべきなのだ。